

氏名	中 村 祐 子
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博 美 第 306 号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉東京藝術大学大学美術館所蔵「阿弥陀三尊来迎図」の想定復元模写 〈論文〉悉皆金色を中心とする彩色技法に関する研究～東京藝術大学大学美術館所蔵「阿弥陀三尊来迎図」の想定復元模写を通じて～
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 教授（美術学部） 宮 廻 正 明
（論文第 1 副査）	〃 客員教授 有 賀 祥 隆
（作品第 1 副査）	〃 准教授（美術学部） 荒 井 経
（副査）	〃 教授（ 〃 ） 木 島 隆 康

（論文内容の要旨）

東京藝術大学大学美術館所蔵「阿弥陀三尊来迎図」一幅（絹本著色 119.5cm×50.5cm 13世紀）（以下、芸大本とする）は、三尊の肉身と衣を全て金色で表す悉皆金色の三尊形式による来迎図の一作例である。阿弥陀来迎図は、浄土教の興隆とともに平安時代後期から鎌倉時代にかけて多様な展開をみせ、鎌倉時代末以降には悉皆金色のものが多く制作された。その中でも芸大本は、同形式の来迎図の中で比較的、欠損が少なく加筆も見受けられず、保存状態が非常に良好である。特に三尊に施された截金にはほとんど剥落もなく、制作当初の様子を窺うことができるという点でも貴重である。

本研究の目的は、芸大本の彩色技法と制作工程を分析し、自ら復元模写を制作することで、悉皆金色の阿弥陀来迎図の造形意識および表現効果を解明することである。

芸大本は、所蔵する東京藝術大学大学美術館の蔵品目録に載るのみで、現在までほとんど注目されることはなかった。作品自体も優品でありながら、同形式の阿弥陀三尊来迎図の研究史の中で取り上げられることがなく、正当な評価を受けてきたとはいえない。しかし、本研究によって、彩色技法を解明し、想定復元模写制作によって描かれた当初の姿を提示することで、芸大本の価値を再検討した。

芸大本は平成 4 年から平成 6 年にかけて修理が行われ、その際の記録写真（肌裏紙をはずした絹の裏面の写真と X 線透過写真）によって、悉皆金色の彩色方法が通常の絹本の描画方法とは異なる制作工程をとることが分かった。また、目視調査や現状模写制作によって様々な彩色技法が使い分けられていることが推測できた。本研究では、修理時の資料を活用し、さらに高精細デジタル撮影や透過赤外線撮影、蛍光 X 線分析による調査を行った。そして、これらの調査で得られた情報と、同時代の類例作品との比較を基に、実際に芸大本の想定復元模写を行うことで、彩色技法について検討した。芸大本に大きな欠損や加筆がないことは、保存状態が良好であったことのみならず、優れた彩色技法によるものであると考えられる。また、芸大本の彩色技法を解明することで、同様の技法で描かれたであろう同時代の他の阿弥陀来迎図の研究に関する資料となることを期待する。

具体的な研究方法として、まず剥落から覗く絵具層を詳細に観察することで、通常では見ることのできない制作工程を推測した。その推測から科学調査を行い、得られた資料とサンプル制作によって顔料の種類や彩色技法について検証した。また、欠損部分の図様は類似作品から類推した。そして、これらの研究成果を基に、想定復元模写を作成した。実際に想定復元模写を行うことにより、どのような彩色

技法が用いられたかを再現し、また描かれた当初の姿を提示することで、初めて絵師の技法の表現効果が明らかになると考えた。

本研究では、芸大本における悉皆金色の制作工程を解明し、截金を剥落せず美しく見せるために平滑な下地が作られ、金の発色を良くするために下地に丹とみられる赤色系の顔料が塗布されるなど、制作上の工夫を明らかにした。また、芸大本との比較により、同時代に描かれた他の悉皆金色の来迎図においても、同様の工夫がされていることが推測できた。さらに、芸大本を詳細に調査することで、群青と緑青などの顔料同士の混色や、さらにそれらの顔料と染料の混色や重色によって空間表現や立体表現がなされていることが分かった。また、水で抽出された布海苔を絵絹に塗布し、絹の目をつめることで彩色を容易にしたことも考えられた。このような彩色技法や制作工程の工夫は、一見しただけでは分からない繊細なものであり、芸大本は制作当初の彩色をよく残していることから観察することができた。そのことから、芸大本は同時代に描かれた来迎図の中で、優れた作例であるといえる。

この研究の意義は、平安時代後期から鎌倉時代にかけての阿弥陀来迎図の変化について、以下のような新たな視点を提供することにある。鎌倉時代には浄土教の興隆とともに、来迎図も量産されるようになった。仏身が光輝くという「悉皆金色」の教えは直接的に解釈されるようになり、仏身も平安時代にはあまり使用されない金箔や金泥によって表現されるようになったことで“世俗化”や“工芸化”したと言われる。しかし、本研究によって、金一色に見える表現の中にも様々な技術や工夫がされていることが解明され、鎌倉時代の悉皆金色の阿弥陀来迎図が、単なる量産品ではなく、高度な技術に基づいて新しい荘厳性を追求していたことを指摘できる。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、鎌倉時代（13世紀）に制作された東京藝術大学大学美術館所蔵『阿弥陀三尊来迎図』について、就中、阿弥陀三尊の肉身と着衣を金色で表す所謂「悉皆金色」に注目し、その彩色技法と制作工程を、目視はもとより修理報告書や光学的調査結果に基づき想定復元模写を行うことで解明すべく論述したものである。

本論文は序論、第一章・鎌倉期の阿弥陀三尊来迎図について、第二章・作品調査、第三章・調査資料に基づく素材と技法の研究、第四章・想定復元模写による技法再現、結論で構成される。論述の中では、過去の修理で分かったことで、裏彩色が施されていないことで、表面の下図線が明確にとらえられたこと、今回、特に念入りに行った光学的調査（高精細デジタル撮影、透過赤外線撮影、蛍光X線分析）の結果、明らかになった成果の一つとして、「悉皆金色」が三尊の肉身と着衣の全体に鉛白・丹具で下塗り、金泥を薄く刷き、肉身にはさらに金泥を重ね塗りして表されていることや、虚空の群青地には画絹の表裏両面に墨で塗布していること、また色料において顔料同志や顔料と染料の混色などが用いられていることなどを想定復元模写に活かし、それぞれにサンプルを作成して確認して、模写本を完成させている。その論述は形式、内容とも妥当であり、今後、当代の「悉皆金色」の阿弥陀来迎図の表現技法を考察する上で基本的な論文になりうるものとして高く評価できる。

(作品審査結果の要旨)

東京藝術大学大学美術館所蔵「阿弥陀三尊来迎図」の想定復元模写である。

現在までの研究においては、積み重ねによる成果の結果から結論を導き出してきた。しかし今回、修士課程において現状模写をおこなう事により、多くの疑問点が生じてくることにより仮説を立てることができた。その仮説を実証するために作品を制作する方法をとった点では新しい試みであった。

そこで、目視により剥落から観察できる絵具層を詳細に観察し、制作工程を推測した。その推測過程

に従い、高精細デジタル撮影や透過赤外線撮影、蛍光X線分析を行い、得られた資料をもとにサンプル制作を繰り返し、顔料の種類や彩色方法を検証していった。

特に本研究では悉皆金色の制作工程の解明に重点をおき、金の発色をよくするための赤色系の丹が下地に使われている等、今まで金一色に見える表現の中にも様々な工夫と技術が隠されている事の解明に成果を上げた。また、截金の再現も完璧に行い、描かれた当初の状態を再現することにより現状では得られなかった截金の効果の再現にも成功した。その他にも、群青と緑青などの顔料の混色や、顔料と染料の混色、塗り重ねによる空間表現等、今まであまりのべられてこなかった多くの彩色技法を解明する成果を上げた。今後この想定復元模写は貴重な資料になることが期待される。

(総合審査結果の要旨)

修士課程において東京藝術大学大学美術館所蔵「阿弥陀三尊来迎図」の現状模写を行った。博士課程では復元模写を行うことにより、研究を継続して進めていった。

芸大本は保存状態も良く、同形式の来迎図の中では損傷や加筆が少なく、特に三尊に施された截金には制作当初の美しさを感じ取ることができる。このような優れた作品でありながら、現在まで研究がなされることが少なく、適切な評価が行われてこなかった。そこで本研究では、平成4年から6年にかけて行われた修理時の記録写真の解読、科学的（高精細デジタル撮影や透過赤外線撮影、蛍光X線分析）調査、美術史的（阿弥陀来迎図の様式）考察、目視（大学美術館内での原本による）調査、同時代の類似作品（修復実習）調査等をおこない、それらを複合的に考察し、下図を描き彩色方法を検討し想定復元模写に繋げていった。特に今回は絵師による絵画技法の表現効果の観点にも着目し、多くのサンプルを試作した結果描かれた当初の姿を再現することに成功した。本研究により藝大本は秀逸な作品であることが証明され、価値の再評価に繋がる貴重な研究成果であった。また今後の阿弥陀来迎図研究の上でも重要な資料になることが期待できる。